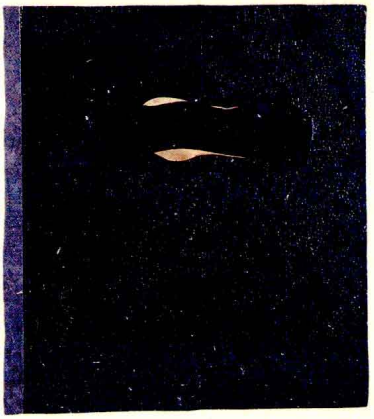
偏見と差別はどのようにつくられるか

黒人差別・反ユダヤ意識を中心に



ジョン・G・ラッセル

明石書店

ジョン・G・ラッセル (John G. Russell)

文化人類学者。岐阜大学教養部助教授。
1956年ニューヨーク市生まれ。79年マサチューセッツ州アムハースト大学人類学学部・アジア研究学部卒業。88年ハーバード大学大学院人類学学部にて博士号取得。94年より現職。
〔主要著書〕
『日本人の黒人観』(新評論)

偏見と差別は
どのようにつくられるか
——黒人差別・反ユダヤ意識を中心に

定価はカバーに表示してあります。

1995年10月31日　第1刷発行
1996年4月1日　第2刷発行

著　者 © ジョン・G・ラッセル
発行者　石井昭男
発行所　株式会社 明石書店
東京都文京区本郷1－10－10
電　話 03 (3818) 6351
FAX 03 (3818) 5962
振　替 00100-7－24505
郵便番号 113

組　版　株式会社アート
印刷所　株式会社プロスト
製本所　株式会社難波製本

装丁　根本眞一

ISBN4-7503-0745-9

偏見と差別はどのようにつくられるか

黒人差別・反ユダヤ意識を中心に

ジョン・G・ラッセル

明石書店

プロローグ

人間は神話を作る動物である。

神話は未知な世界の現象に意味と統一を与え、われわれに安心感と秩序を与える。われわれが抱く基礎的な憶説を疑わずに生き続けるための偽りである。神話はわれわれが暮らしている幻想の要塞の基礎的要素であり、この要塞の壁は、われわれを未知な世界からだけではなく、自分自身から守っているのである。

現代世界で流行(はや)っている神話によると、われわれは「略奪する黒人」「陰謀好きなユダヤ人」「言葉狩りをする少数派の人びと」「世界経済の支配を企む日本人」が存在している世界に住んでいるそうだ。この空想の世界では、南京虐殺とホロコーストが単なる作り話であり、広島と長崎に投下された原爆は、人間の命を奪った凶具ではなく、人びとを救った愛すべき平和の偶像であるという。こうした神話をただの無知として片づけることは難しい。無知の定義の一つは、「知識が足りない」であるが、問題は知識不足にあるだけではなく、むしろ誤った知識の多重にある。もっと深刻な問題は、信者が物事をすでに分かっているという固い信念にあり、どんなに彼らに対し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

て事実関係に反する証拠を見せても、すぐ崩れないということである。神話は、われわれの理性ではなく、感情、先入観、偏見や差別意識にアピールしているからこそ、その幻想の世界から抜け出すことが非常に困難である。これを支えているのは、知識人、文化人、政治家、報道人、企業家などであり、社会的に大きな責任を持っている彼らこそが幻想の要塞の「建築家」と言ってもよい。

それらの神話は、マスメディアと大衆文化に反映されているだけではなく、両者は神話の助長に重大な役割を果している。他者を悪魔化(demonize)し、恐怖や嘲笑の対象にさらすことは他者を理解するより楽であるし、経済的、政治的に利益も大きい。異なっていると思われている人びとを同じ人間として見るのでは市場で売れない。売れるのは、曲解され、デフォルメされている煽情的な他者像なのである。マスメディアと大衆文化が提供する他者像は、怪物であり、脅威であり、道化であるが、決して自分と同じ理性、感情を有する人間ではないのが情報世界の常識である。

先端技術の発展によって情報の量が膨大となりつつある一方、それらを丁寧に評価する時間が少なくなった。情報を評価する基準は信頼性ではなく、その情報の娯楽性であり、先入観や憶測の情報を取り入れるものが圧倒的に勝っている。ヴァーチャル・リアリティ(仮想現実)という概念の人気の秘密の一つは、われわれが要求しているのは、現実ではなく、現実に近い空想の世界を約束していることにある。とは言え、仮想現実を体験するために未来を待つ必要はない。現代

の情報社会は現実をわれわれの先入観に合うように仕立てている。たとえば、在日韓国・朝鮮人、在日外国人、アイヌなどの少数派に対する差別の報道を通して、日本が「単一民族国家」という神話を崩そうとする特集がテレビなどで報道されても、彼らの姿が日常的にテレビドラマなどには映し出されていない。彼らのマイノリティとしての存在は「社会問題」としてしかとらえられていない。日本社会の多様性に貢献している一員としては認めていない。

一般に、少数派の人びとが体験する差別問題を「少数派問題」(minority problem)とか「在日問題」「アイヌ問題」「黒人問題」「ユダヤ人問題」などという。そのような表現は、少数派の人びとを「問題」としてとらえ、問題の核心が少数派を差別する「多数派」(majority)にあるという現実を隠蔽(いんぺい)している。「問題」という言葉も曖昧である。少数派にとって、問題は多数派の彼らに対する偏見と差別ということであるが、多数派にとって問題は少数派の存在そのものである。ナチスドイツでは、「ユダヤ人問題」の解決は簡単であった、つまりユダヤ人を抹殺するということであった。アメリカでは、「黒人問題」の解決方法は、黒人をアフリカに戻すことと白人社会から隔離させることであった。日本では強制的同化政策である。現在、ボスニア・ヘルツェゴヴィナでは「民族浄化」という名でセルビア人によって「モスレム問題」が「解決」されている。

言葉が現実を明確にするより隠蔽するために利用されているということが、現在日本における「言葉狩り」とアメリカにおける「ポリティカル・コレクトネス(political correctness)」をめぐる論争の核心である。言語の保守派は、政治の保守派同然、「表現の自由」と叫びながら、表現に潜

入している暴虐性、圧制性に抵抗する人びとの自由を認めない。この論争は表現をめぐる論争でありながら、歴史の解釈をめぐる論争でもある。神話を崩そうとするものと神話を助長しようとするものとの間の論争である。

この論争の深刻さは、われわれが過去をどう受け取るかということに見られる。戦後五〇周年を迎えた今年、戦争に関する神話が日米両国において一層強くなってきている。両国が自らを被害者と思い込み、加害者としての責任を直視せず、回避する姿勢をとり、戦争の残虐行為を隠蔽し、正当化するため、そうして「歴史浄化」のために、さまざまな神話を蘇えらせている。

神話に満ちている世界には、確実なものが存在しているのだろうか。「人間が過去の誤りから学ぶもの」、「思いやりを持つもの」、「真実を求めるもの」それらもわれわれが抱いている神話に入るだろうか。人類の生存のため、神話によって犠牲になった多くの人びとのために、その答えが「いいえ」と望むしかない。

偏見と差別はどのようにつくられるか

——黒人差別・反ユダヤ意識を中心に

目次

Part I

プロローグ——3

「外人」と「内人」との間——11

「外人」の中の外人——日本人が観る黒人　12
「誤報化社会」を支える「外来像」と「和製映像」　16
誰にでもすぐ乗る日本の煽情的報道界（イエロージャーナリズム）　26
商品化された流行の黒人文化　42
日本の黒人グッズの悪癖　49
日本における「放言の自由」　64
自己反省的象徴（セルフ・リフレクティブ・シンボル）としての黒人像　72
日本の国砦化の現状　87

Part II

繰り返される過ち ―― 93

憎悪の商人たち 94

日本の反ユダヤ人主義の深層 103

「言葉狩り」狩り、「PC」狩りと歴史修正主義 114

中止されたスミソニアン「原爆展」と被害者意識の政治学 120

原爆投下史――事実(ファクト)とフィクション 127

加害者同士の論理 135

エピローグ ―― 139

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

◎資料編 143
① ジョージ・サラットJr.氏のプレス・リリース
② NTVの「WHY?」放送に使用されたエスニック系スーパーマンの映像に関するDCコミックス社からの返事
③ *CULTURAL ANTHROPOLOGY*
④ 『朝日新聞』(一九九三年三月五日朝刊)「声」に掲載された投書
⑤ 「声」に送った原文の投書
⑥ 「声」担当者への手紙
⑦ 訂正を求める「声」への手紙
◎注 155
◎参考文献 168

Part I

「外人」と「内人」との間

「外人」の中の外人——日本人が観る黒人

私は、日本に生活している数多くのいわゆる「外人」の一人として、日本人の黒人観を展開したいと思う。私がいう「外人」とは、普段使われている狭い意味の「外国人」という意味ではなく、もっと広い意味での「外人」のことである。つまり、文字通り、「ヨソの人」「ヨソモノ」「ヨソから入って来る人」または、もっと強い言い方をすれば、私の造語であるが、「内人」が「ヨソに追い出された人」という意味の「外人」である。

そうした意味の外人が日本社会に大勢いる。たとえば、障害者、肉体労働者、女性、被差別部落出身者、在日韓国・朝鮮人、同性愛者、被爆者、帰国子女、アイヌ、在日外国人がいずれも、さまざまな形で「ヨソモノ」扱いにされている。

日本人の黒人観を考える際、そうした意味での日本人の「外人」観と別にしては考えられない。日本の社会構造、日本人の権力及び勢力に関する考え方、そして日本が受けた西洋文化とその思想の影響と緊密にかかわっている。

日本社会には「外国人の身分制度」が実存し、同じ外国人であっても、欧米白人が非白人より

上と見られているという事実がある。その態度を一言でいうと、欧米白人＝「質の良い、高尚な外人」に対して、非白人＝「質の悪い、面倒のかかる外人」「日本に害を与える外人」という先入観がある。肌の色、国籍や文化の差異によって在日外国人がランク付けされ、彼らの「外人」としてのステイタスに大きな格差ができる。

日本人の黒人観と言えば、多くの日本人の脳裏には、日本の政治家の差別発言とか絵本『ちびくろサンボ』、黒人商品、黒人商標などの問題が浮かび上がってくるようである。しかしそれらは、氷山の一角でしかない。問題はもっと深いところにある。

私が日本人の黒人観を研究し始めた時、日本人の黒人観が西洋人の黒人観と意外によく似ているということに驚愕した。黒人のいわゆる「人種的身体的特徴」の卑屈な戯画にせよ、黒人を形容する言葉にせよ、いずれも、その中身は西洋白人が長い間抱いていた固定化された黒人観と根本的に変わりがない。たとえば、黒人は「怠けもの」「頭が良くない」「性欲が強い」や「運動神経が優れている」「天性的なリズム感がある」「感情的」「攻撃的」「汚い」などというような固定観念を持っている日本人が、いまだに少なくない。あまり報道されていなかったが、一九九三年三月一八日に兵庫県の県議会議員で自民党所属の小久保正男が、県議会の委員会で「黒人と握手すると、こちらも黒くなる感じがする」という黒人に対する差別的発言をした。[1]

西洋の場合、奴隷制度や黒人に対する抑圧や搾取を正当化するために、そうしたステレオタイプを作り上げたが、黒人奴隷制や黒人の搾取の歴史のない日本が、黒人に対して欧米と同じよう

なステレオタイプを抱くようになったのはなぜだろうか、と私は不思議に思う。

日本人の黒人観を説明するには、まず第一に、日本社会の権力や地位に関する考え方、そして、第二に、日本と西洋世界との歴史的な関係に触れなければならない。

日本はステイタスを非常に意識している社会である。日本人は地位の高いものに対しては尊重を示し、地位の低いものに対しては、見下す傾向がある。その考え方が日本の封建時代の身分制度に見られるだけではなく、一六世紀から一九世紀初期にかけての日本人の欧米白人観の変容にも見られる。その当時において、日本人の白人観は、非常に軽蔑的であり、西洋人を「毛唐」「赤毛人」「南蛮人」と見下していた。しかし、明治時代に入り、欧米の権力の拡大と同時に、日本人の西洋人観が変化しはじめ、一種の西洋文化崇拝主義があらわれ、福沢諭吉をはじめ、明治の知識人の間に「脱亜入欧論」が流行し、アジアその他の非西洋世界に対する優越感が強化された。

一六世紀には、白人は下の存在として見られていたが、欧米人の奴隷、召使という低い地位として日本に連れて来られた黒人は、白人よりさらに低い地位にあった。日本人の白人観が変わり始めたにもかかわらず、黒人に対する蔑視は変わらなかった。むしろ、黒人は白人に支配された「被征服民族」と見られ、当時の身分制の底辺にあったいわゆる「賤民」にたとえ、「賤民」と同様に黒人を獣として軽蔑し、非人間化している記録がある。また、「士農工商賤民」という身分制度を形成した支配階層は被支配階層を分離することで、各階層のメンバー間の比較により低い身分の階層に対して優越感を与えていたように、欧米との関係においても、欧米人の中での自分た

ちの地位が気になった明治時代の日本人は、自分たちよりもっと低い身分を持つ民族――つまり黒人奴隷――がいるということに対して、一種の民族的優越感を覚えたかもしれない。

社会的地位の差異は情報交換にも影響し、その権力の格差によって支配者側が被支配者に対しての情報の提供者となっている。日本の場合、白人支配者が提供した被支配者である黒人に関する一方的情報が、日本人の黒人観の形成に重大な役割を果たしてきた。要するに、日本人の黒人に関する情報は、白人を通して日本に入り、しかも白人の黒人に対する偏見にあふれた誤報であった。黒人は「猿の化身」や「文明を持っていない未開人」などという誤報が西洋文化とともに日本に入り、日本の蘭学者たちや知識層によって広められ、一種の常識として受け入れられた。

以上のことから、日本人の歪んでいる黒人観がかなり長い歴史を持ち、決して最近の現象ではないことがわかる。日本人と西洋白人との出会いは、同時に、日本人と黒人との出会いでもあり、西洋白人が日本に初めて到着して以来、日本人は白人と同様に、黒人を蔑視するようになった。身分の低い乗員や奴隷及び召使として日本に連れて来られたアフリカ黒人の非人間的待遇を正当化しようとしていた白人支配者にとって、黒人は人間以下のモノであり、日本人に向かって黒人のことを語った時、黒人を蔑視し、獣などにたとえたという例が当時の日本の記録に保存されている。そして、なお、一九世紀から現在に至るまで、西洋の文化的影響の広範な普及とともに、日本人は西洋白人の人種観を素直に飲み込み続けている。その誤報の遺物の一つは、現在の日本人の黒人観に見ることができる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com